月刊

こころのとも

第四巻
十月号

祈りは誰のため

多くの人の祈りは
自分のための祈り

戦争が止んだ社会
誰もが幸せな社会

自分の先祖のため
自分の家族のため
自分の成功のため
自分の出世のため

そんな社会のため
皆で祈り続けよう

ほんとうの祈りは
ひとのための祈り
無私のあいの祈り

新たな心光寺

滝と岩と
もみじ織りなす
心光寺
新たなところ
新たなこころ

生きがいを感じたい人は

九、約束ごとを大切にしよう。

人間は社会の中で、生まれ、育ち、働き、死んでいきます。社会を離れて人間は存在しえません。ロビンソンクルーソーのように、無人島で独り孤立して暮らしたとしても、やはり社会の中にいるのです。なぜなら、彼は人から言葉をおぼえ、人から生活の仕方を教わって、それを使って今も生き延びているからです。

この人間の本質とも言える社会を成り立たしているものは、それは人と人との「約束ごと」なのです。ここで、私が括弧を付けて約束ごとと言いましたのは、普通の人と人が、例えば、何時に、どこで会おうと約束するようなものから、道徳や倫理、法律や伝統といった、およそ社会を成り立たすであろうような、人と人の関係を取り決めるようなもの一切を含んでいます。もっとも一般的な言葉で言いますと、「人の道・仏の道・神の道」ということになると思います。

ですから、そういうものを大切にしないと、社会は崩壊していくことになります。社会が殺伐としてきます。ぎすぎすとしてきます。私には、今の日本、いな世界がそうなっているように思えるのです。

例えば、人が仲良く、幸せに暮らしていくために政治はありますが、その政治を与（あず）かる政治家の公約たるや、ティッシュペーパーで鼻を拭いたら丸めて捨て去るように、選挙で当選したり、自分独りのエゴイスティックな、その時々の目的を達したら、それだけで用を達したとばかりに、破り捨てられ、破棄されてしまいます。それは国際政治から、国政、地方政治にいたるまで、変わりはないように思えます。ロシア大統領訪日の一方的な約束破棄、前総理大臣の政治改革の約束違反、地方首長のクリーンな政治の公約反古（ほご）化、などなど数え上げればきりがありません。

人間はどうも、他人を無視しても、自分が勝手に何でも決められ、いつでも変更できるのが、自分に力があり、偉いのだと勘違いするようです。実は、そんなことをしますと、自分がますます社会に定位できなくなって、バランスを崩し、人の道、仏の道から遠ざかっていっているのです。でも、そんな人ほど、そのことに気付けなくなっています。

孔子の教えを書いた『論語』の中にも「六十にして、みみしたがう」というのがあります。それは六十歳になったら、人の言うことに耳を傾け、それに従って行動す

るようになるべきであると、説いているのです。

人間は、仏さまと一体になって、心の中で仏さまに支えて頂けるようにならない限り、誰か他人に支えられなければ、自分を安定させることは出来ません。また、人の道、仏の道に合った行いを、誰の支持もなく行うことも出来ません。また、真の幸福である、いわゆる安心立命に達することもできません。

ですから、仏さまと一体とならないうちは、他人の言動で自分の行動を間違いないものにしなければならないのです。他人の言葉に従った行動をしなければならないのです。孔子の説かれた「みみしたがう」という言葉の真意はここにある、と私は思うのです。

しかし、他方には、牛を市場に売りにいく親子の話があります。それは、道中、他人の言うことばかりを気にして、牛を扱っていたら、市場にたどり着く前に、牛が暴れ出して逃げてしまったという、話です。この話は、他人の言葉に振り回されて、自分を見失ってはならない、という教えだと思うのです。

なかなか、難しいですねえ、人生は。大抵のことわざには、全く反対の意味を持つものがあります。例えば、「烏合の衆」ということわざがあるかと思えば、「三人寄れば文殊の智慧」ということわざもあります。

こうしたことは、何を意味しているのでしょうか。それは、人生ではバランスが大切だ、ということを示しているのではないかと思うのです。釈尊もおっしゃいましたが、中道が大切なのです。神さまや仏さまのような絶対なものは別ですが、人間のような相対な存在は悲しいかな、常にバランスをとっていなければなりません。自分の信念を持つことと、他人の意見に従うこととが、よくバランスしなければならないのです。信念や自信がありますと、どうしても自分の意見に固執しやすくなりますし、逆に、他人の意見ばかりを尊重していますと、自分を見失い、だんだんと何ごとも積極的にできなくなってしまうのです。

さて、先ほどの孔子の言われた言葉ですが、やはり、孔子の言われますように、「みみしたがう」という境地は、バランスが崩れているようですが、そうではないのです。それは、みみしたがえないようなことは、もともとしていないということでもあり、何事も、世俗のことでも、てきぱきと処理できているということでもあるのです。また、たとえみみしたがってもそれで自分を見失うようなことはない、ということでもあるのです。

でも、そうなるのはなかなか大変です。「あたま」で分かったぐらいではなれません。修行がいります。

—法句経

自作詩短歌等選

せめぎあい

かぞくみんながせめぎあう

くにとくにとがせめぎあう

たみとたみとがせめぎあう

みちとみちとがせめぎあう

このよいつまでせめぎあう

闇の中

執らわれりゃ
一寸先も
闇の中

間違った世の中に

間違った
世の中に
間違った
宗教

これぞ
誠の
末法ぞ

存在

存在は
ただあるだけ
なのに
人間は
執らわれて
ある

自己も
他者をも
あるがまま
受け取らなければ
人間に
しあわせは
決して来ない

みほとけの心

明日の日を
生きるもよし
死ぬるもよし
ただみほとけの
心のままに

みほとけの
心のままに
あるならば
生きて感謝し
死しても感謝す

分からぬ悲しさ

ひとのことなら
分かるのに
自分のことが
分からない
分からぬことが
分からない

ああ
業の中の
悲しさよ

親の苦しみ

自閉症児は
自分の親とも
こころを
通わすことができない

だから
親の悩みは
果てしなく続く

あたかも
今日の
人類の悩みを
一身に
背負っているが如くに

芭蕉翁

芭蕉翁
老荘思想で
目を開き

本音と建前

家庭の中で
本音と建前を
区別したり
統合できないでいると

子どもの
自我が育たない
子どもの
自他が統合できない

発言の社会的意味

人が言った言葉は
社会的意味をもつ
責任を伴う

意味を持たないのは
飲み屋で話す
ばかばなし

カウンセリングでの
治療的なやりとり

でも

現実の生活が
そうなってしまったら
人はおしまい

捨て猫

秋雨に
泣いて親呼ぶ
捨て子猫

苦しみとヨーガ

苦しみを
逃れたければ
苦しみの
ただ中に立ち
ヨーガに励め

自作随筆選

中内功氏の教育論

七月三日（土）の日経に「ハウツーより好奇心大切、父権復権で一流信仰破れ」と題し、ダイエー社長・中内功氏が教育論を展開していました。

その中で、「個性主義」の大切さを述べ、それによって初めて、一人一人の知的好奇心がはぐくまれ、独創性が伸ばせると述べています。そして、家庭での教育のあり方として、次のような点を指摘しています。

「子供を育てる時に“和の精神を大事にして、素直な人間に”としつけるか、それとも“他人とどこか違うところをつくれ”としつけるか。

前者であり続ける限り、独創性は育たず、世界的に見るならば、ノーベル賞を受賞できるような人間を育てることもできないと思う。この意味で、自分の子供をどのように育てようとしているか、世の親は自省すべきである。」

この文章を読んで、驚きました。中内氏は、小売業者として、日本一になりましたが、教育は素人だと思いました。また、日本の目指すべき方向がどこにあるのかが、分かっていないし、したがって世界のあり方も分かっていないように思いました。

日本が世界で果たす役割は、ノーベル賞を多く取ることなぞにはありません。日本は、むしろノーベル賞といった賞は取り止めるよう提案すべきなのです。なぜなら、人間の個人間、あるいは国家間の競争をあおるような賞はやめるべきだからです。日本は幸いにして「和をもって貴しとする」国民なのです。

いま、民族間、宗教間の対立が世界の方々で問題になっています。それが原因で、方々で殺し合いが行われて

います。民族差別・人種差別はいけないと言いながら、新たなナショナリズムが台頭してきています。それをあおるものは、オリンピックのようなスポーツであり、経済競争であり、宗教であり、ノーベル賞に象徴されるような文化なのです。こうした、個人間の、あるいは、民族間・国家間の競争をあおるような、個人主義的・個性主義的文化によって世界は争いの中に立たされているのです。

ですから日本が、世界を巻き込んでこれ以上に経済競争をあおるのは、戒めるべきです。そうではなくて、日本人が古来より重んじてきた「和をもって貴しとする」ような精神的な文化を、世界に広めなければなりません。それによって、世界的経済競争を抑え、世界平和を実現していかなければならないのです。そうすることによって初めて、民族・人種の、あるいは、宗教の統一を果たすことが可能となるのです。

このように、いま、日本に求められているは、中内氏が言うように「他人とどこか違うところつくる」教育ではありません。そうではなくて、それと全く反対の「和をもって貴しとする」ような人を作る教育であると言えるのです。

イン・シャー・アッラー

二月二十一日のＮＨＫ「こころの時代」は、ひろさちや氏への井筒屋アナウンサーのインタビューでした。

ひろさちや氏の話の中には、とても俗っぽくて、気になることが幾つもありましたが、特に気になったことを一つだけ取り上げて指摘しておきたいと思います。

それは、コーラン十八章二十三節にあるという、イスラム教の「イン・シャー・アッラー」という言葉の解説についてです。この言葉は、イスラム教の人が口癖にいうものだそうで、日本語に訳せば、「もし神が望まれるなら」という意味のようです。この言葉の使い方について同氏があげた、たとえ話によりますと、アラブ人は約束の時間に一時間寝過ごして遅れて来ても、その言い訳は、「もし神が望まれるなら」だそうなのです。つまり、こういう具合に遅れたのは、自分のせいではなくて神が望まれたからだ、と言うわけです。聞いていて呆れました。

同氏は、これは、全てのことについて、神に下駄を預る態度で、「神下駄主義」とでも呼べるもので、素晴らしい、と言うのです。そして、この態度は日本人に多い

「人間努力主義」といい対照をなしている、と言いいます。日本人の好きな人間努力主義は無宗教主義で、同氏は嫌いなのだと言うのです。

私には、この解説には幾つも間違いがあるように思えました。まず一つ目は、自分が不注意にも寝過ごすことまでを、神のせいにすることの無責任さについてです。もし人間がこのように、人との約束をいい加減にするようになりますと、大げさに言えば、人間社会の崩壊につながって行きます。寝過ごして約束の時間に遅れるということは、単なる自分の不注意であり、それまでも神のせいにすることは、間違いだと思います。こんな態度や主義を推し進めて行きますと、人を殺すのまでも神のせいにしてしまいそうです。人を殺したり、人のものを盗んだりしないのも、お互いの約束に基づいていることなのですから。

もう一つは、人間努力主義が無宗教であり、いけないことのように言われますが、これも間違いです。

人間が人間らしいのは、今日よりもよりよい明日をめざして、「ひたすら」努力し、精進するからなのです。そして、それは、宗教を持つ者にして始めて可能なことなのです。ただ、努力することにいけないことがあるとすれば、それはその努力することに執らわれることだけです。

人間は、同氏があげたたとえで言いますと、人との約束を守ろうとしてひたすら努力しなければなりません。しかし、健康を損ねたとか、事故にあったとか、何かしらよんどころのない、誰が考えても了解出来るような理由で、守れなかった時は、それに執らわれないことが大事なのです。お互いがそれを了解しあい、許し合うことが、大切なのです。

ひろさちや氏の「神下駄主義」が、次のような意味であるならば、私にも賛成できる、そういう意味について次に述べておきます。それは、自分の自由にならないものまでも、自由にしようとして思い悩んではならない、そういうことは神におまかせしていればよい、ということです。良寛さんも言われましたように、「事故にあうときは、あうがよろしい。死ぬるときは死ぬるがよろしい」ということなのです。つきつめて行きますと、明日食べる食料のことも、明日になって考えればよい、ということになります。もし食べるものがなければ、飢えればよい。ずっとなければ、飢えて死ねばよい。それは自分の計らいを越えていることでもあるのです。しかし、人間はそれでも幸せを感じることが出来るようになれるのです。

釈尊のことば（十六）

―法句経解説―

前回の（六一）の「旅にでたら、自分より愚かな者を道連れにしてはならない」という偈の解説を読んで、この偈は矛盾しているのではないか。どう思うか、と質問して下さる人がありました。その人は真面目に修行に励んでいる四十歳前後の僧侶の方で、仏教についてとても博学な方です。質問の内容は、大切なことでしたので、皆さんにも知って頂きたいと思います。その人が言うには、誰もが自分より愚かな者を道連れにしなかったら、誰も一緒に歩む人がなくなるのではないか。だから矛盾しているのではないか、と言われるのです。つまり、二人が道連れになるときの二人の間の優劣は、二人が等しい場合と、どちらかが優れ、どちらかが劣る場合とがありますが、「自分より愚かな者を道連れにしてはならない」ということは、等しいとき以外は道連れになれない、ということになってしまうというわけです。

なるほど、理屈はよく分かります。でも、一つだけ検討しなければならない問題があります。それは、旅にでるという言葉と道連れという言葉の意味についてです。ここで、旅に出ると言いますのは、求道という道を歩む旅のことを言っています。また、道連れですが、これは未だ道に達しないものが、自分が達すべき目標とすることができる人、つまり師と仰ぐ人の近くに、いつもいることを言っています。それを自分が求めていることを言っているのです。

でも、道を求めている人の中には、もう目的地に達し、道連れは仏さまだけという人もいます。そういう人は人間の道連れは必要ないわけです。第二巻二月号の随筆で「善き友」と題して、釈尊が誰とでも善き友であったことを『雑阿含経』から紹介しましたが、そういう道に達した人は、道を求める人なら誰とでも善き友となれます。でも、自分が友がなければ困るわけではありません。ただ、道を求める人と善き友になって、人を「老いねばならぬ身にして老いより自由にし」「病まねばならぬ身にして病より自由にし」「死なねばならぬ身でありながら、死より自由にし」てあげたい、そういつも望んでいるのです。それだけが、道に達した、釈尊のような人の生きがいなのです。

ここに真の修行道場や僧団や教会の意義があります。こういう事情を頭に置いて考えますと、この偈の意味がより明確になってくるのではないかと思うのです。つま

り、ここで言っていることは、大乗仏教で言われる上求菩提下化衆生を心掛けている人にとって、師と仰ぐ人は人生の、求道の道連れであり、教化してあげる衆生は善き友である、と言ってもよいと思います。ですから、善き友ではあっても、ここでいう道連れではないと言えるのではないかと思うのです。

求道の旅で自分が師と仰ぐ人がいないときは、独りで修行の道を歩むべきであるが、しかし、自分より未熟な人を教化していくことを拒否すべきだと言っているのではないのです。そういう人へは善き友となって、導いてあげるべきなのです。

（６２）「わたしには子がある。わたしには財がある」と思って愚かなものは悩む。しかしすでに自己が自分のものではない。ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか。

この偈を、実感として分かって頂ける人は、殆どいないのではないかと思います。いくら言われても自分の子は可愛いですし、自分の財産を捨ててしまうことは出来ません。まして、自分の命や自分の名誉はそれ以上に大切に思えます。しかし実は、そこにこそ、釈尊が捨てるべきだと言われた「執着」の根源があるのです。

人間には生きようとする衝動が無意識の中に存在しています。唯識という仏教の一派では、それをアーラヤ識と呼んでいますが、その衝動が人間にエゴへの執着（我執・利己主義）を形成します。そして、それを、同派ではマナ識と呼んでいるのです。私たちがこの偈のように「自己が自分のものではない」と思えるには、このアーラヤ識とマナ識を制することが必要です。

では、どうすれば制することが出来るのでしょうか。

そのことを考える前に、どういう過程で我執が出来るのかを、先ず見てみたいと思います。先ほど見ましたアーラヤ識は、生の衝動でしたが、それは、食欲となり、性欲となり、優越欲となって現れます。私たちは、こうした欲望を達成するために、感覚―運動機能（からだ）を使って外界に働きかけます。より発達が進みますと、認知―言語の機能（あたま）を使ってより可能性を高めながら、外界を統制しようとします。そうした試みがうまく行きますと、快い情動が起こり、失敗しますと苦の情動が起こります。また、人との関係では、主に喜怒哀楽の情緒が起こります。人間は、こうした自分の「こころ」の動きを手がかりに、自分の生の衝動のより効率よい満足とその拡大を目指して行動して行きます。分かり

やすく言いますと、より安定して生き延びようとするわけです。進化論から出た言葉でしょうか、いやな言葉ですが、「サバイバル」を目指すわけです。

そのためには、子どもをもうけたがり、経済生活を安定させ財産を貯めたがります。また、自分を拡大する欲求を持ちます。多くの人から尊敬されたい、自分が死んでも何時までも偉かったと言ってほしい、自分の子孫がいつまでも続いて欲しい、と思うのです。

人が、こうしたことを目指し、こうしたことを実現して、生の可能性を安定化させ、高めるほど、人は我執を強めて行くのです。自分が、自分で、人間が、人間で、生きていけると思ってしまうのです。自分の老いや死すらも、さらには自分の生活環境すべてをも、自分で自由にしたがるようになります。現代の医学や科学技術もそうなっているように思われます。

こうなりますと、人間は真の幸せからどんどん遠ざかっていっています。でも、そういう人ほど、そのことにすら気付きません。

これが、我執を付けて行く過程なのです。この我執を捨てるにはどうしたらいいかを、いよいよ検討したいと思います。

実は、私たちは無意識の中にこうした生の衝動の他に、仏教で「如来蔵」と呼ばれる、「他者を求める傾向」を宿しているのです。如来さまのような「無垢な」慈悲の心を宿しているのです。そして、それは自己を定位すべき他己の原基なのです。

人間は悲しいかな、自分の生存の可能性を高めれば高めるほど、自分が外界に定位できなくなってしまうのです。そして、定位でない状態が続きますと、遂には崩壊の憂き目に会うのです。これが相対なものの宿命なのです。つまり、相対なものは、自分が可能性を高めたと思ったのが、実は自分を崩壊させる道を歩んでいたことになっているのです。

それを避けさせてくれるのが、先ほどあげた他者を求める無意識なのです。無垢な他者に向けた潜在的な心なのです。そして、この無意識の、「感情」への表出が、「人の心を感じるこころ」であり、人を思いやる、優しさなのです。そして「人格」への表出が社会の秩序を重んじたり、人の期待を尊重したり、「人の道」を大切にして行こうとする心になるのです。先のエゴとこうした心との統合が、人間を真に人間たらしめるのです。

そのためには、ヨーガや瞑想によって無意識に下りて行ったり、真言瑜伽行のような修法によって心を仏で満たしたりしなければならないのです。

後記

一、九月二十三日の秋分の日に、午前中降っていた雨が上がり、勝浦からトラックとワゴンで来ていただいた方々とお隣の方に手伝って頂いて、何とか三時ごろ、主なものを積み込みました。勝浦に着いたとき、暗くなっていましたが、檀家の方が、更に十人足らず来て下さり、一時間ほどで下ろすことが出来ました。十月三日にも勝浦からトラックをお借りして運転して行き、お隣の方に手伝って頂いて、残りの大体の家財を運びました。大変お世話になり、ありがとうございました。

二、まだまだ、全部は片づいていません。仕事をしながら、ぼつぼつ片づけています。こちらに、お出かけの節はぜひお立ち寄り下さい。

三、九月二十七日と二十八日の二日、一人の修行僧の方が泊まられました。歩いてお四国を巡礼している方でした。高野山大学を卒業し、高野山に住まれていて、いろいろ、信仰のこと、宗教界のこと、仏さまのお祠りの仕方など、何時間も何時間も話し合ったり、教えて頂いたりしました。二日目の夕方にはお滝に入られていました。いろいろな方とのご縁が出来そうです。

四、また、犬を飼い始めました。八月十七日に、生後二ヵ月ぐらいの、柴犬の雑種を、こちらの方に頂きました。メスで、エリーと名付けています。以前飼っていたダルメシアンのトムと違い、とても躾けがしやすいように思います。上にあげて飼っていますが、滅多にしくじりません。一度いったら、食卓にも手を掛けません。

五、いま世界でもっとも注目されているユング心理学を、私の「自己・他己理論」に関連付ける論文を書きました。四百字詰原稿用紙で八五枚程度になりました。ユングという心理学者は、ヨーロッパ人として初めて心理学に「他己」の考え方を取り入れた人で、ヨーロッパと東洋の一つの架け橋となった人です。でも、ヨーロッパへの執着を離れていません。着想だけは評価されますが。

月刊　こころのとも　第四巻　十月号（通巻四十六号）

平成五年十月八日

〒771―43
徳島県勝浦郡勝浦町星谷野田尾一二六
ひびきのさと　星の岩屋　心光寺

（沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　清心者寺院心光寺　口座番号　徳島9―53708